

老院長の連続手術ミス事件

大熊由紀子（朝日新聞科学部記者・当時）

「大自然」特集・医療を考える 1971年9月号

お医者さんの世界には、ヤクザの世界顔負けの、おかしい“道徳”がはびこっている。

たとえば、苦痛を訴える患者のおなかを外科医が開いて、ガーゼやタオルを発見することがある。それもシロウトが考えているよりもずっとしばしばあるらしい。もちろん、前に手術した医師がおき忘れたものにちがいない。

だが……。

「かかる場合、第二の医師は、第一の医師のためにこの異物を隠し、患者の人々に医療過誤であったことを秘するのが、同業者に対する医師の仁義である。しかしこの事件では、医師の意に反し、見習看護婦の不注意によって、この事実が家族の知るところとなり（後略）」

法律にくわしい高名な病院長が、れっきとした医学雑誌で看護婦さんを責めている。

同業者の失敗を隠し通すことが「道徳的」であり、うっかり知られるような「不注意」はせぬよう。これがこの世界のオキテであるらしい。

*

日赤産院の高名な老院長の連続手術ミス事件も、このようなオキテに守られ、外にもれることなく、犠牲者がふえていった。日赤産院で失敗が多らしい、といううわさを私が耳にしてから、苦勞のすえ全貌をつかむまでに一年余もかかった。

不妊をなおすための手術がもとで、オムツがはなせなくなった若妻、おなかの傷から生理が出るようになってしまった主婦、妊娠を子宮筋腫と誤診され、子宮をとり出されてしまった未婚の女性、帝王切開のあとの傷口がひどくうんで寝たきり状態になってしまったの若い母、そして死んでしまった何人もの女性たち……。

「こんなところにいたら殺されてしまう。そっとお逃げなさい」と看護婦さんにささやかかれ、逃げ出し、再手術で命びろいした女性たちにも会った。しか

し他の病院へこっそり移るにはツテと金がいる。

「付き添いしている私は72の田舎もんやし、女やし、そんなえらいことはようしません。娘は骨と皮になって死んでいきました」と泣きくずれる老母もいた。

これらの手術を手がけた老院長は、かなり重い糖尿病で、そのため、ひどく視力をおかされていた。そればかりか、診療中にも尿をもらすことがあり、判断力もかなりおとろえているように見受けられた。

「だれかが訴訟をおこせば、記事になるよ」と新聞社の先輩は助言してくれた。しかし、どの人も経済的、肉体的にいためつけられ、訴訟をおこす余力もなかった。ある婦人は、大病院へ転院するとき世話になった医師から、「訴訟などという、大それたことを考えぬように」とクギをさされていた。

カルテは医師ににぎられている。しかも「事件がおきてからでもカルテはお書きかえになってかまわないのでございます」と弁護士が医師会の講習会でそのかしているのを聞いたことがある。

訴訟をおこし、再手術した医師に、前の医師の失敗の証言を求めても証言に立ってくれた例はまずない。しかも費用と時間がかかる。そして万一勝っても死んだ人はかえらないし、誤ってとられてしまった子宮がもどるわけではない。早く記事にして、これ以上犠牲者のでるのを防がなければと思いつつ、訴訟を勧める気持ちに私はとてもなれなかった。

『産院関係の医師の調べ』ならイケルよ」という先輩もいた。そういう勇気のある医師がもしいたならば、ミス続出はくいとめられたはずである。この種の“事件”では「警察の調べ」も例がない。

結局、患者の悲劇を集め「朝日新聞の調べ」としてぶつけるしかなかった。

「医学の世界に新聞社が首をつっこむとはけしからん」「行きすぎだ」という批判もあった。しかしあの院長に危険な手術をやめさせるために、他にどのような方法があったろうか。

記事が出て院長は手術をやめ、新しい犠牲者の発生をくいとめることはできた。しかし…視力のおとろえた院長のミスを知りながら、それを止めることをしなかったまわりの医師たちの体質まで変えることはできなかったと思う。その体質の中で、今日も日本のあちこちで第二、第三の“日赤産院事件”がヤミにほおむられているにちがいない。